

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第32巻 第4号



手取峡谷黄門橋からの白山

白山に源を発する川の一つ手取川は、中流域の旧吉野谷村と旧鳥越村の境で、高さ30m近くの断崖絶壁の手取峡谷となって流れ下っています。周辺は獅子吼・手取県立自然公園の一部になっていて不老峡、綿ヶ滝、黄門橋などの景勝地があります。黄門橋は国道360号線の白山市釜清水町と吉野を結ぶ橋で、そこからは手取峡谷の素晴らしい景観と、空気が澄んでいれば白山を眺めることができます。高倉山の後方に見える白山は、加賀禅定道の天池室跡付近から四塚山、七倉山、大汝峰へと続く稜線が見えています。太陽の位置の高い日中より朝夕の、光が斜めにさす時の方が白山を眺めるには適しているでしょう。

(上馬 康生)

白山の雪形「猿たばこ」

納口 恭明

「雪形」を知っていますか？

白山に現れる雪形を知っていますか？・・・というよりも、そもそも「雪形」という言葉を知っていますか？

雲や林を見ていると、ふと何かの形に見えたりすることがありますよね。星座もそうですが、雪融けの頃の山肌の黒い部分と残雪の白い部分が作り出す大小様々な形からなる白黒のまだら模様も、空想をふくらませてみるといろいろな姿形に見えてきます。自然の気まぐれのようなこの白黒模様は、地形・植生・気候が大きく変わらない限り、同じ形の変化がほぼ毎年くり返されるのです。

このような残雪と山の地肌が作り出す形を、日本では古くから、「種まき爺さん」、「^{しろ}代かき馬」、「川の字」など人、動物、文字、物などに見立て、田植えや種まきなどの農作業をはじめの目安として、あるいは水不足になるかどうかを占う合図として使用し、伝承していたといわれています。

これは一般に「雪形（ゆきがた）」と呼ばれ、北海道から中国、四国地方にいたるまで日本全国の積雪地帯に広く分布しています。雪形には山の地肌の黒を背景とし、残雪の白を形としてみる白いタイプ（写真1）と、逆に白を背景とし、黒を形としてみる黒いタイプ（写真2）があります。

雪形の現状をお教えします

雪形は季節の風物詩としてしばしば、その出現が地方の新聞でも記事となり、雪形を知っている一部の人々の関心を集めています。有名なものは観光資源としても利用され、人気も高いのですが、その一方で、多くのものは農事暦としての実用上の役割はなくなり、雪国で生活する人々の日常生活からも遠ざかりました。また、一部の有名な雪形を除き、たとえ文献上では存在していても、実際にどれかを確認することはとてもむずかしいのです。田淵行男氏の著書の中では、日本全国で約300の雪形を紹介していますが、このうち、実際に特定できるのは約半数に過ぎません。

ところで、雪形という言葉自体は古くからあったわけではありません。昭和10年代頃から文献に現れ始め、雪形が全国的に知られるようになったのは田淵行男氏の名著「山の紋章 雪形」（1981年、学習研究社）によるところが大きいと思われます。とはいえ、実際に「雪形」という言葉を知っている人は、ほとんどいないことも現実です。

研究の対象としての雪形は古くから主に民俗学の分野に属しており、自然科学的な視点からの研



写真1 福島県吾妻小富士の白いタイプの雪形「雪うさぎ」



写真2 新潟県妙高神奈山の黒いタイプの雪形「跳ね馬」

究はほとんどありません。このため、文献には名称や伝承についての記述はあっても、雪形を地形図上に示したものは全くと言っていいほどありません。ですから、写真やスケッチでの記録、あるいは、それを知る地元の人の説明がなければ、複雑な残雪の白黒模様の中から目的とする雪形を特定することはほとんど不可能なのです。

雪形は科学の宝庫

雪形はどうして毎年現れるのでしょうか、そしてその形は何によって決まるのでしょうか？また、その現れる時期は毎年、変わらないのでしょうか？

雪形が現れてから消えるまでの形とその変化を支配する基本的な要素は、雪の積もり方と融け方のふたつです。雪が同じように積もり、同じように融けると雪形の白黒模様は現れません。雪の融け方でいうと、同じ向きの斜面では雪面からの融解はほぼ一様です。したがって、雪形が現れるのは雪の積もり方が一様でないためです。

このような一様ではない積もり方を生み出す一番大きな理由は地形の凹凸です。一般に、地吹雪のような風による雪の移動や、大規模なものは雪崩に代表されるような重力による雪の移動は急斜面の雪を少なくしたり、地形の凹凸をなめらかにするように作用します。その結果、一様ではない積雪分布ができあがります。それが融けはじめると、積雪量の少ないところから黒い地肌が現れ、それが広がり、残雪の白い部分が消え去って雪形の季節が終わるのです。雪形の出現が毎年繰り返されるのは、数十年、数百年の期間では積雪量と地形が大きく変動しないためです。ですから、雪形の出現時期、出現から消滅までの形の変化、それらの年ごとの変化には積雪、融雪、地形、植生の情報が隠されているのです。

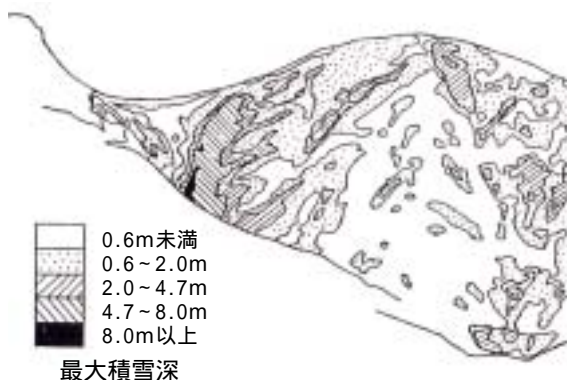


図1 豆まき入道の形の変化から推定した積雪分布
(遠藤八十一氏)

とくに、雪形の現われる時期については気象条件と関係し、冬の間の雪の量と春の暖かさが敏感に反映され、大きいときで1か月程度の変動をすることもあります。このため、雪形がいつ現れるかは冬と春を合わせた地球の暖かさ寒さの指標としての意味を持ちます。また、雪融けにともなう雪形の形の変化は複雑な山の積雪の分布の推定のための情報として(写真3、図1)、さらに、地すべりなど、地形の特徴を解読するための情報として(写真4)利用することもできるのです。

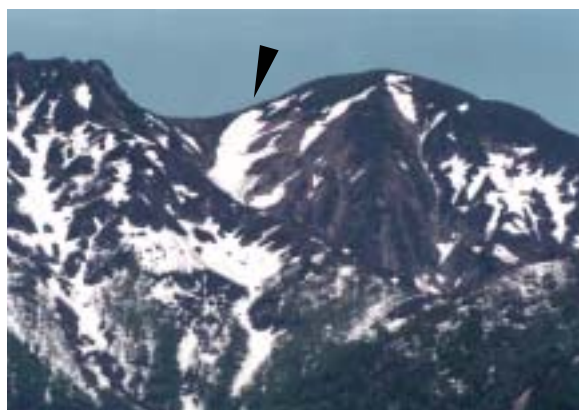


写真3 新潟県八海山の白いタイプの雪形「豆まき入道」
(遠藤八十一氏撮影)



写真4 地すべり地形を表す白いタイプの雪形「日輪」
(山田穰氏撮影)

雪形の空白地？石川県

雪形は全国各地に分布するといいましたが、とくに長野県、新潟県、富山県、山形県などは雪形の宝庫です。ところが、富山県に隣接する石川県は白山という名山があるにもかかわらず、なぜか伝承のあった、あるいは伝承のある雪形の存在はこれまで少なくとも研究者の間では確認されていませんでした。「山の紋章 雪形」では石川県では1件のみ、「不明 白山にのみあると聞いている」と記述されています。また、鷲走ヶ岳に鷲の形の雪形が出ると書かれている文献もありますが、伝承があった証拠はなく、推測にとどまっています。ところが、まったくの偶然から、著者が石川県に出る伝承雪形の糸口をつかんだのです。これからわかることは、現在、伝承雪形がおかれている現状であり、失われて行く貴重な雪国の文化遺産に対する警鐘でもあります。

発見！白山の雪形「猿たばこ」

2003年8月10日加賀市中谷宇吉郎雪の科学館で著者が行った「雪形って知っていますか？」という講演会の後、参加していた親子連れのお母さんが話しかけてこられ、「家のお婆ちゃんから、そのような話を聞いたことがある」というではありませんか。さっそく、その場でそのお婆ちゃんから電話でお話を伺いました。「猿たばこ」という名前ですが、決してたばこを吸っている不健康な猿の雪形ではなく、たばこの葉と猿に見立てた雪形が白山に出るといいます。その場では翌年の雪形のシーズンになったら、訪ねていくので、「猿たばこ」がどれかを教えていただけるように約束しました。

2004年5月14日、新潟大学の和泉薫先生と加賀市打越町にあるこのお婆ちゃん宅を訪問し、「猿たばこ」を2004年5月10日中谷宇吉郎雪の科学館の神田健三館長の撮影の白山の写真をもとに特定しました（写真5）。

この雪形は畦塗りの目安としてかつては伝承されていたといえます。田植えは、戦前は6月頃行われていましたが、今は5月はじめであり、雪形伝承も農業技術の進歩とともに失われたようです。

伝承地の加賀市打越町（約100戸）では農業を営む昭和一桁生まれまでの人には常識のようです

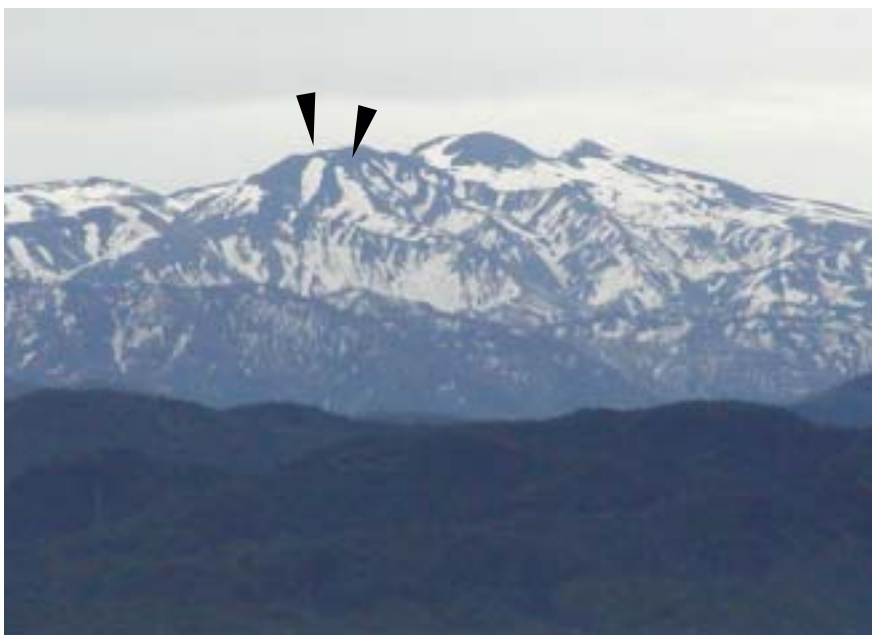


写真5 「猿たばこ」(2004年5月10日、神田健三氏撮影)
向かって左がたばこの葉、右が横向きに座っている猿

が、若い世代はほとんど知らないであろうとのこと。このお婆ちゃんのご主人とこの季節になると「猿たばこ」のことをよく話すといえます。お嫁さんには直接話した記憶はないが、そんな会話を小耳にはさんでいたのではないかとのことでした。お婆ちゃんの息子さんは、聞いたことはあるがすぐ忘れて、どれが「猿たばこ」であるか、わからないとのことでした。お婆ちゃんが実際によく聞いていたのは両親からで、自身が農事の目安として使っていたわけではないといえます。昭和30年代頃から「猿たばこ」は聞かれなくなったそうです。

打越で調査中に、通り合わせた同じ集落の男性（昭和5年生まれ）に「猿たばこ」について伺ったところ、当然のようにご存知でした。ところが、隣の箱宮という集落に住む、この地域の歴史に詳しい古老に伺ったところ、このような雪形についてはまったく知らなく、大変興味深く感じました。戦前まで、この辺りでは婚姻は主に同じ集落でのみ行われており、したがって雪形伝承は他の集落には伝わらなかったのではないかと考えられます。

結成、雪形「猿たばこ」調査隊

2004年6月4日、この地域の学区の小学校である加賀市立分ぶんぎょう校小学校において5、6年生を対象に理科の時間に雪形の文化・科学・国際性・楽しみ方についての授業を実施するとともに、授業を受けた児童を「雪形猿たばこ調査隊」に任命し、それぞれの家族に対し、対面での聞き取り調査をお願いしました。分校小学校は、打越、箱宮、高塚、分校の4つの集落の児童が通学する学校で、雪形「猿たばこ」の認知度について把握するとともに、それ以外の雪形の発掘を目的とするものです。これは、学校側の積極的な協力で、1、2、3、4年生を含む全校生徒に拡大されました。聞き取り内容は、雪形「猿たばこ」を知っている人の年代と地域、それ以外の雪形の存在についてです。

有効回答数は105件、このうち父母世代62件、祖父母世代43件でした。この結果、祖父母世代では28%が知っていたのに対し、親世代では3%、子供世代で0%ということがわかりました。雪形はもともと親から子へと伝承されたものと考えられています。伝承が途切れてしまった現在、雪形「猿たばこ」は今回の分校小学校での講演および調査が無ければ1世代後には忘れ去られた雪形となっていたかもしれないのです。

石川県で研究者の間に雪形が知られてこなかった理由も明らかです。伝承が失われたことと、伝承の地域が非常に限られていたことにほかなりません。しかし、これは石川県に限らず大なり小なり他の地域についても当てはまることかもしれません。

さらに続々石川県の雪形

この調査では、小松市大杉から福井県境にある大日山に「いぶり形」と呼ばれる残雪からなる白いタイプの雪形が田植えの目安として使われていたことがわかりました。「いぶり」とは田植え前の田を平らにならすための道具です。ただし、この雪形についてはまだ特定されていません。

分校小学校での授業の様子は、地元マスコミ各社に公開され、さらに広く県内からの情報発掘を可能にしました。2004年6月23日、北國新聞に掲載された記事に反応し白山に出現する「猿たばこ」とは別の雪形に関する情報が、小松市松崎町在住の78歳男性から寄せられ、電話での聞き取り調査を実施しました。この結果、小松市松崎町に4月下旬から5月上旬にかけて「カラス、コウモリ、ツバメ」という3種類の山の地肌からなる黒いタイプの雪形が現れ、野菜の苗植えの目安として「3つが出る前に苗を植えると霜にとられる」という伝承で、昭和40年代まで使われていたことがわかりました。さらに、白山市（旧松任市）から見える白山に「水竜」、「火竜」という残雪から



写真6 黒いタイプの雪形「ブレーメンの音楽隊」(竹内由香里氏)



なる白い2つの竜の雪形が出現し、水不足を予想する目安として用いられていたとの情報も得られました。

雪形伝承復活への道

失われて行く貴重な雪国の文化遺産としての雪形の現状、雪形のもつ科学的な意味、石川県にも存在した雪形発見について述べてきました。ところで、雪形は伝承の消失とともに消えるだけのものなのでしょうか？雪形伝承復活への別のポイントを述べたいと思います。

たとえば科学的な素材としての雪形は必ずしも歴史的に伝承されて来たものである必要があるのででしょうか。誤解を恐れずにいえば、その時代その時代にあった新しい雪形を見つけ、新たなネーミング、科学、お話などをセットにして、新しい伝承のスタートとしてもいいのではないのでしょうか(写真6)。ただし、それが伝承として定着したかどうかは後世の人が判断することでしょう。

文字どおり星の数ほどある残雪模様は、特殊な観測機器なしでも興味ある人すべてにもれなくオリジナルの雪形をプレゼントしてくれます。またスケールを変えて、例えば宇宙から見た雪形や火星に現れる雪形というのも雪形の新しい視点かもしれません。また、海外に目を向けてみると、日本以外にも残雪の白黒パターンに名前をつけている例はノルウェー・アメリカ・スイス・カナダ・ニュージーランド等でも散見されます(写真7)。しかし、外国には「雪形」に相当する言葉はありません。したがってもしかすると「ユキガタ(yukigata)」も「津波(tsunami)」のように国際用語として使われ出すのも夢ではないかもしれません。ともかく、雪形に興味をもたれた方はまず身近



写真7 米国ユタ州の白いタイプの雪形「ドラゴン」

にある伝承雪形を実際に見ることからはじめてはいかがでしょうか。

雪形に関する問い合わせや、石川県の雪形に関する情報ありましたら、筆者(電話 029-863-7753 FAX 029-863-7510 e-mail nhg@bosai.go.jp)までご連絡ください。

(防災科学技術研究所)

大汝峰はいつできた

東野 外志男

白山は30～40万年の歴史を有する火山です。この30～40万年の歴史の中で噴出場所を変え、現在の山頂部から活動を開始したのが、今から3～4万年前頃と考えられています。最も新しい活動は350年ほど前の1659年（万治2年）です。気象庁の分類によると、白山は活火山とされており、将来活動を再開する可能性のある火山です。

白山山頂は御前峰(2,702m)、剣ヶ峰(2,677m)、大汝峰(2,684m)の三主峰からなります。これらの三主峰がどのようにして形成されたかは、興味のあるところです。将来の活動を考える際にも知っておく必要があります。三主峰の中で大汝峰については、これまではおよそ10～13万年前に形成した古白山火山の一部をなしていたと考えられていましたが、最近の調査によると、3～4万年前の年代値を示し、新白山火山に属することがわかってきました。大汝峰のできた時期やでき方については、これまで考えがいろいろと変わってきました。今回、大汝峰の形成についてこれまでどう考えられてきたか、最近の調査成果をふまえながら紹介します。

大汝峰は山頂部の活動による

白山火山についての地質に関する記述は、19世紀末までさかのぼりますが、断片的なものです。白山の成り立ちや岩石などについて比較的まとまった考察をしたのは、当時第四高等学校の教授であった田中睦男氏の研究が最初です。この研究成果は、1924年に出版されています。調査域は山頂部の狭い範囲でした。大汝峰と周辺の高まりは、巨大な溶岩円頂丘（lava dome）であると記しています。つまり、地下深くにあった溶岩が地上に流出し、その火口付近で固まりドーム状になったものであるとしています。

一方、御前峰や剣ヶ峰を中心とし東西及び南に広がる高まりは、大汝峰を形作った火山活動の前にできあがったとしています。噴火の場所は、御前峰と剣ヶ峰の間あたりにあったと考えていたようです。御前峰の稜線や剣ヶ峰などの高まりを、かつて存在した火口壁の残骸と考えました。現在、御前峰や剣ヶ峰などをすぐに火口壁であると判断するのはむずかしいことですが、最初にできた火口壁がその後の噴火などによって破壊されたためだと考えました。

田中氏の調査の後、1960年頃まで白山火山の形成に関する研究はほとんど行われていませんでした。1960年代から1980年代にかけ、当時の金沢大学教授の山崎正男氏が中心になり、同僚や大学院生、学生などと共に、白山火山の地質や岩石に関する調査を精力的に進められ、形成史が組み立てられました。調査域は最初白山山頂部に限られていましたが、その後は山頂部のみならず、山頂北方の岩間や尾添尾根、東方の大白川な



写真1 大汝峰(2,684m) 南の登山道から望む

ここに見える高まりは、かつて古白山火山の一部と考えられていたが、最近の調査（北原ほか、2000）により、新白山火山に属することが示された。

ど幅広い地域について調査がなされ、白山火山の形成史について、新しい知見が多く得られました。

山頂部周辺に限られていた初期の調査では、山頂部に限られたこともあって、田中氏と同様に山頂部周辺の噴出物を中心に形成史が組み立てられました。大汝峰についていえば、この高まりは、かつて存在した溶岩や火山砕屑岩などからなる成層した火山の北部を構成していたものであるとしました。その火山の噴火中心は大汝峰の南にあり、この火山の南東部が浸食もしくは噴火によってなくなり、山体北部の残された部分が大汝峰と推定しました。活動中心や活動規模など詳細については、田中氏の考えとは異なりますが、大汝峰を構成する噴出物は山頂部の噴火によるというところは田中氏と同じです。また、御前峰や剣ヶ峰等からなる高まりを形成した活動がこれらの活動とは別にあり、御前峰や剣ヶ峰などからなる尾根が火口壁を形作っていたというところは、田中氏の考えをほぼ引き継いでいます。ただし、大汝峰の形成時期については、御前峰や剣ヶ峰を形成する活動の前とされている点は田中氏とは異なります。その理由として大汝峰を構成していたもとの火山体の破壊程度が、御前峰と剣ヶ峰の火山体よりもより進んでいることをあげています。

大汝峰は古白山火山の残骸

大汝峰の形成について、山崎氏らの考えが大きく変わったのは、調査がこれまでよりも広範囲に進められ、白山火山の噴出物が山頂部のみならず幅広い地域に分布することが確認されるとともに、それらのなかに、その分布などから現在の山頂部とは異なる場所から噴出したものが存在することが明らかになったことによります。その結果、現在の山頂部を活動中心とする火山体以外に、活動場所を異にする3つの火山が他に存在することがわかってきました。そしてそれらを加賀室火山、古白山火山、うぐいす平火山とし、現在の山頂部を活動中心とする火山は新白山火山と名付けられ

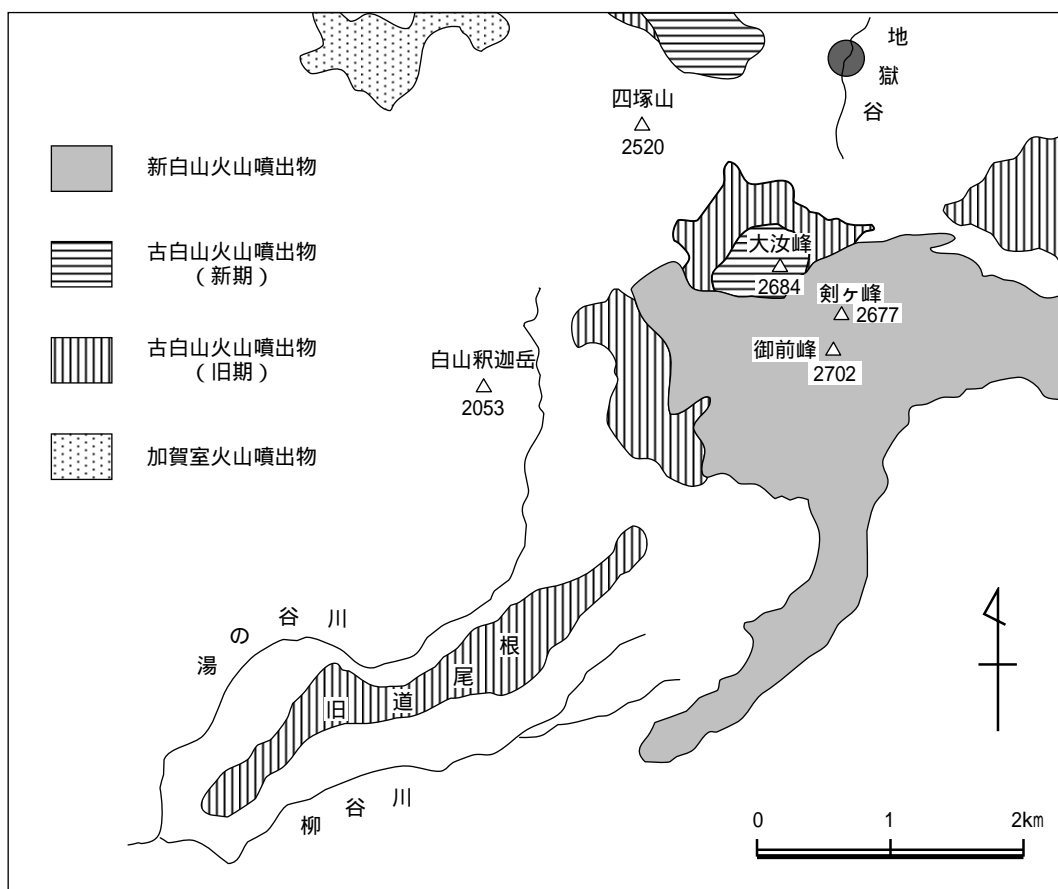


図1 大汝峰が古白山火山の一部と考えられていた頃の白山火山噴出物の分布図
長岡ほか(1985)などをもとに編図。●の付近に古白山火山の活動中心があったと推定されている。

ました。その形成時期は、浸食程度などから加賀室火山が最も古く、古白山火山がそれに続き、新白山火山とうぐいす平火山はほぼ同時期と考えられました。その後、加賀室火山について 30～40 万年前、古白山火山について 10～13 万年前の K-Ar 年代値が得られました。

K-Ar 年代とは、放射性的 K (カリウム) 元素が崩壊して Ar (アルゴン) 元素に変化する時間を利用してもとめた年代で、岩石に含まれる両元素の量を測定して得られます。上記の各火山の年代値は、それぞれの火山体を構成する溶岩



写真 2 大汝峰 北から望む

最近の調査 (北原ほか、2000) により、上部の溶岩について 3～4 万年前、下部の溶岩 (層状になっているあたり) について約 13 万年前の K-Ar 年代値が得られている。

について求められたもので、ここではその値を火山の形成年代としています。厳密には年代測定した溶岩が、地上に噴出して固結してからの年代を意味します。

加賀室火山の噴出物は、山頂の北西におよそ 8km 離れた、目附谷と丸石谷の間の尾添尾根に長さ約 10km 幅約 2km にわたり分布します。浸食がかなり進み、かつての火山斜面がほとんど残されていないこともあり、噴火中心や火山体の大きさなどについてはほとんどわかっていませんが、成層火山を形成していたと推定されています。古白山火山は現在の山頂の北約 3km の中ノ川支流地獄谷を中心とし、標高が 3,000m を超える成層火山であったと考えられています。この火山の噴出物は新白山火山に比較しておよそ 15 倍あったと推定される大きな火山でしたが、現在中心部はほとんど失われており、主に溶岩や火山砕屑岩からなる山体の斜面だけが各所に残されています。その代表が白山山頂の北西に広がる清浄ヶ原です。うぐいす平火山は山頂の北東約 4km にあり、直径約 500m の 2 個の火山からなる小さな火山です。

ここで、問題の大汝峰や周辺の溶岩類などのことですが、これらは北北東約 2km に噴出口があった古白山火山の一部と考えられました。また、それらの南西、湯の谷川と柳谷川にはさまれた通称旧道尾根とよばれている稜線 (観光新道や白山禅定道が通っている) に分布する溶岩類なども、古白山火山の山頂から流下したもので、大汝峰とともに古白山火山の南西側山腹の残存したものと考えられてきました。この考えは最近まで、受け入れられていたものです。

大汝峰は新白山火山に属する

大汝峰について、上記のそれまでの考えと変わったのは、1997 年度から 1999 年度にかけて建設省北陸地方建設局金沢工事事務所 (現国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所) によって行われた「白山砂防地質特性調査」によってです。この調査の成果の詳細は、まだ公表されていませんが、その概略については 2001 年に発行された紺野義夫氏による「石川県地質誌・補遺」などで紹介されています。また、成果の一部は学会でも報告されています。

それらによると、白山火山についていくつかの新しい成果が得られました。空中写真判読や現地調査に加えて K-Ar 法による年代測定が行われた結果、これまで古白山火山の一部と考えられていた大汝峰 (下部を除く) や旧道尾根が、新白山火山の噴出物であることが示されました。K-Ar 年代測定はこれまで主に北部や東部地域について行われており、山頂部についての測定はわずかで、大汝

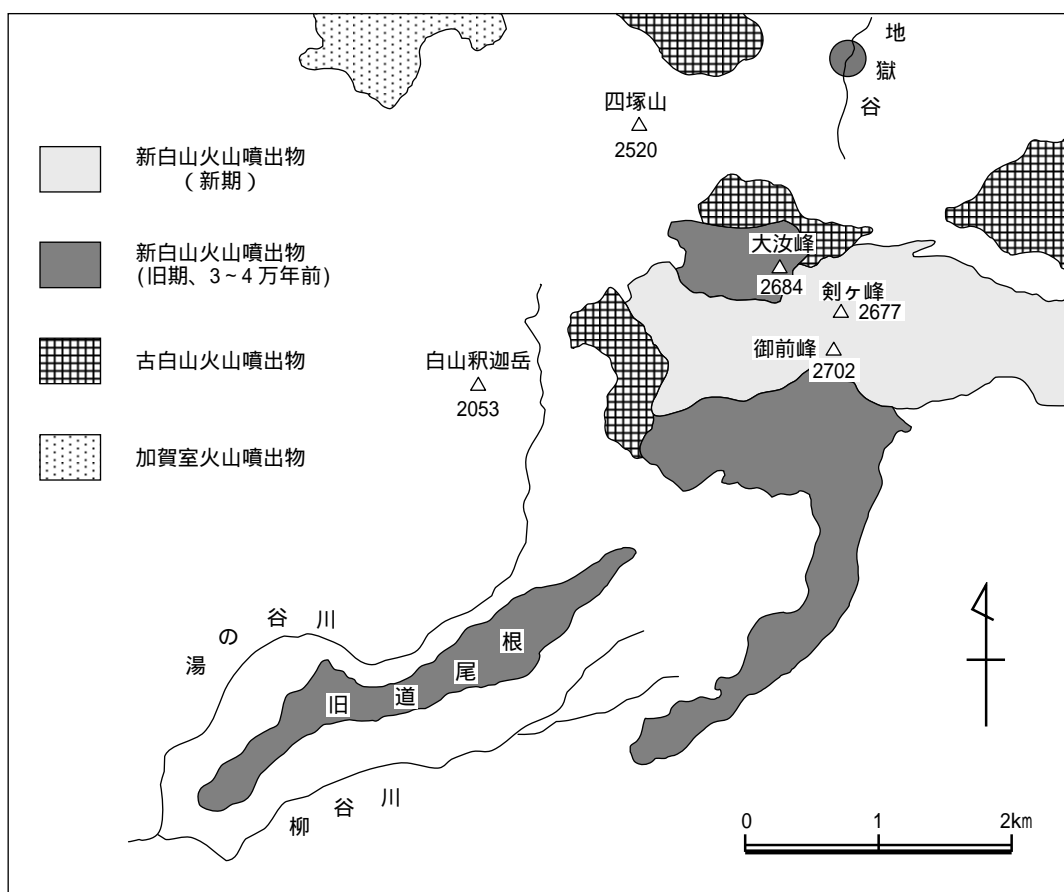


図2 最近の調査による白山火山噴出物の分布図

綿野(2001)、北原ほか(2000)などをもとに編図。●の付近に古白山火山の活動中心があったと推定されている。

峰についてはこれまで測定はなされていませんでしたが、この調査によって山頂部を中心に K-Ar 年代測定が行われました。その結果、これまで古白山火山の一部とされていた大汝峰の上部や旧道尾根の天井壁付近の溶岩について得られた年代値は3~4万年前で、新白山火山に属するものと判断できるものでした。また、南竜ヶ馬場から南西方向に流下している新白山火山の溶岩についても、これらとほぼ同じ年代値が得られています。一方、大汝峰の下部を構成する溶岩は約13万年前の年代を示し、この部分は従来通り古白山火山に属することが再確認されました。大汝峰を構成する噴出物の噴出場所やでき方の詳細については言及されていませんが、下部を除いた上部の高まりについては、現在の山頂部の活動に関連したものであるという点は、田中氏や山崎氏らの初期の考えに似ています。

白山火山については、これまでも様々な研究がなされており、研究者が現地へ行くと、そのでき方などがすぐにもわかるように考える方がおられるかもしれませんが、それほど簡単なものではありません。そのときそのときに得られた野外や室内での分析データをもとに、最も合理的な考えをだしていくわけです。今回、詳しく調べられているだろうと思われる山頂部のうち、大汝峰の成り立ちについてこれまでの考えを紹介しましたが、将来の調査によってまた書き改められるかもしれません。

(白山自然保護センター)

白山 ワールドセミナー 雪原の野生ザルに接近！

白山の野生を訪ねて サルを数える (2月19~20日 白山市瀬波)



雪深い冬の白山麓で野生ニホンザルをこの目で観察したいと、県内外から6~62才の17名の方が参加されました。雨天あるいは降雪と天候には恵まれませんでした。そんな中でも全員でサルの群れを観察することができ、活発に動く子ザルと『人間の子ども達の姿が印象に残った』2日間でした。

1日目

いしかわ動物園・滝澤 均さんに、白山麓のサルはニホンザルの中でも体格が大きい方との説明を聞き、雪庇の下に隠れたり木の皮を食べる冬のサルの様子を写真でたっぷり見せられた参加者は、野外実習への期待に胸が膨らみましたが、半数近くの方はカンジキを履くのが初めて・・・



雪質が悪くズボ



ズボはまる人続出。大人も子供も深雪とカンジキに四苦八苦。

おっかなびつくり、慣れないカンジキを履いて揺れるつり橋を渡ったり急な斜面を上ったり怖い



なんとか瀬波川キャンプ場までたどり着きましたが、サルのカウント数は0。しかし途中にはノウサギやテンなどの足跡やフンを発見し、『野生動物の健在ぶりを強く感じることができました』。

*『』内は参加者アンケートからの抜粋

瀬波川キャンプ場で休憩



じっと静かにサルを探す講師の滝澤均さん

今回のために作ったサルの見分け方シートが好評。「白山麓より寒い北方に棲むサルは吸った冷たい空気を温めるためか鼻筋が長い」という講義での話も、東北出身の滝澤さんの顔を見てなるほど合点。

2日目

朝から河原山へ移動し棚田をよじ登ると・・・



双眼鏡を使わなくても目視できるまで接近



参加者が立った雪原の100m先で、木の皮を剥いで食べるサルや並んで移動する子ザル達、杉林の中で「フォ」「フォ」と鳴きあうなど、サルの空間が展開。「もっと近づいてみたい？」滝澤さんがサルの様子を見ながらその距離を縮め、雌雄の判別や年齢推定、数を数えることができました。突然サルの甲高い声が聞こえ「お乳を飲もうとした赤ちゃんザルが母ザルに拒絶された悲しい叫び声」と鳴き声の判別も。その職人技に『滝澤先生のサルに対して適度に離れながらも注ぐ愛情の深さを感じました』。

参加者の声

また参加したい。もっと野外を歩きたかった。カンジキウォークは楽しかったが急な所を歩いて怖かった。サルに近づけたことが印象深い。

その他

子供のアンケートに『おんせんにはいったことがいちばん心にのこった』とありました。野生動物がよく現れる山々を見ながら裸で温泉に入ったことは、カンジキで近づいた距離以上に野生ザルの気持ちに近づけた体験だったのかもしれませんが。



サルだって楽するんだから人間だって楽しんで尻滑り (研修交流館白山里 松崎 紀子)



はくさん 山のまなび舎だより

ブナオ山観察舎のキャラクター・かもちゃん

わくわく、冬の森を探検

ブナオ山
観察舎

かんじきハイクに親子からシニアまで

ブナオ山観察舎が実施しているミニ観察会（かんじきハイキング）に親子連れから小中高校生、年配者まで、多彩な顔ぶれの個人や団体が参加しています。県内はむろん、関西などから団体に訪れる常連の皆さんも多く、3月25日までに延べ467人に上りました。カンジキをはいての冬の森の探検は、雪の上の動物、植物、そして空と風との触れ合いです。街では得られない新鮮な体験が感動を呼んでいます。



「いた！ いた！」 昼食時、近くでカモシカを見つけて歓声を上げる小学生たち



「ブナオ山観察舎へようこそ。出発に先立ちスタッフから説明を聞く女性グループ」



スタッフの指導でカンジキをはく親子

常連も、珍客も

～今季のブナオ山の動物たち～

今シーズンは3月末現在で、ブナオ山の斜面と観察舎周辺で哺乳類7種、鳥類21種が観察されました。常連のニホンカモシカやニホンザル、イヌワシやクマタカのほか、珍客では4年ぶりの出現となるイノシシをはじめ、白い子ザル、夜行性で昼間はあまり見られないキツネやテン、アナグマ、ノウサギも現われ、来館者をよろこばせました。ただ、イノシシの登場は生息域の北上を示すものとみられ、気がかりです。

このほか足跡だけの観察ではリス、オコジョが加わります。また4月中にはきつとツキノワグマも見られるでしょう。

鳥類

- イヌワシ
- クマタカ
- オオタカ
- ツミ
- アオゲラ
- コゲラ
- カケス
- シジュウカラ
- コガラ
- ヒガラ
- ゴジュウカラ
- ヤマガラ
- エナガ
- ベニマシコ
- ジョウビタキ
- ルリビタキ
- ミソサザイ
- ヒヨドリ
- ヤマドリ
- トビ
- ハシブトガラス



ブナオ山の稜線の木に止まったイヌワシ（3月21日）



観察舎付近の車道に現れたイノシシの子ども。車に驚き、あわてて逃げた。（2月24日）



観察舎の窓の下に出てきたテン。カメラと目が合ってびっくりした様子。ごめんね。（2月23日）



観察舎の取付道付近で見つかったアナグマ。ヨタヨタとおしりをふりながら歩き去った。（3月19日、白山市・中川慎一郎さん撮影）

哺乳類

- ニホンカモシカ
- ニホンザル
- イノシシ
- キツネ
- テン
- アナグマ
- ノウサギ

楽しい館内展示

観察舎では来館者に楽しく自然に親んでもらうため、各種展示にも工夫を凝らしています。



この木、何の木？
13種類の木の幹と冬芽の標本を展示。さて、いくつわかるかな？



動物の標本 カモシカの標本にかわいい赤ちゃんが加わりました。

きょうのブナオ山
どんな動物がどこに現れたか一目でわかるようボードに表示



かんじきの色々



お知らせ

ブナオ山観察舎は5月5日で今シーズンを終了します。来季は11月20日に開館の予定です。

はくさん 山のまなび舎だより

平成17年度いしかわ自然学校「山のまなび舎」

白山まるごと体験教室 「白山を心と体で体験しよう」

回数	月日	タイトル	内容	場所 (集合場所)	定員
	5月15日(日) 9:00-15:00	ツキノワグマを探そう	野生のツキノワグマ探しにチャレンジ	白峰・湯の谷 (市ノ瀬ビクターセンター)	30
	5月29日(日) 9:00-15:00	新緑のブナ原生林	樹齢数百年のブナの原生林の新緑を楽しみます	白峰・市ノ瀬 (市ノ瀬ビクターセンター)	30
	7月31日(日) 9:00-15:00	川虫と川遊び	清流の中で川遊びを楽しみながら川虫観察をします	吉野谷・中宮 (中宮展示館)	30
	8月28日(日) 9:00-15:00	化石で探る太古の白山	化石や地層を観察して太古の白山について考えます	尾口・瀬戸 (本庁舎)	30
	9月17日(土) 13:30-16:00	秋の音、 ネイチャーコンサート	虫の音、川の音そして野外での演奏。自然の中に浸りいろいろな音を楽しみます	吉野谷・中宮 (中宮展示館)	50
	10月16日(日) 9:00-15:00	紅葉のブナ原生林	樹齢数百年のブナの原生林の紅葉のすばらしさを満喫します	白峰・市ノ瀬 (市ノ瀬ビクターセンター)	30
	2月19日(日) 9:00-15:00	かんじきハイキング	カンジキを履いて雪上を歩きながらのアニマルトラッキング	尾口・一里野 (ブナオ山観察舎)	30

は中宮温泉旅館協同組合と共催

県民白山講座 「白山を知ろう」

回数	日時	テーマ・会場	タイトル・講師(仮題)	定員
	6月18日(土) 13:30~17:00	白山登山と高山植物の集い ・ 白山市鶴来総合文化会館クレイン	白山の夏山シーズンを前に、白山登山の心得や白山の自然について紹介します。	200
	8月7日(日) 13:30~16:00	手取川の自然と人々 ・ 白山国立公園センター	手取川の豊かな水の恵みをもたらした地形の特徴や、人々の暮らしについて紹介します。	100
	10月30日(日) 13:30~16:00	白山と温暖化 ・ 石川県立生涯学習センター (予定)	地球温暖化等の影響による白山の変化や将来予測について紹介します。	200

は石川県自然解説員研究会、白山市と共催。 は白山市と共催。

ガイドウォーク・ミニ観察会 「遊び心で歩こう」

中宮展示館・市ノ瀬ビクターセンターでのガイドウォーク 白山自然ガイドボランティアや職員が周辺の自然を案内。5月~10月の土・日・祝日の10:00-12:00、13:00-15:00の間で1時間程度。

ブナオ山観察舎ミニ観察会 カンジキを履いて雪山を歩き、自然を観察します。12月~4月の土・日・祝日の10:00-12:00、13:00-15:00の間で1時間程度。

センターの動き（2月1日～3月31日）

2.1	野々市町菅原小学校案内	(ブナオ山観察舎)	3.6	白山青年の家案内	(ブナオ山観察舎)
2.3	野生動物等の電波発信機に係るニーズ等に関する意見交換会	(金沢市)	3.8	大阪シニア大学案内	(ブナオ山観察舎)
	金沢伏見高等学校案内	(ブナオ山観察舎)	3.10	兵庫シニア大学案内	(ブナオ山観察舎)
2.5	北国文化センター講師	(金沢市)	3.12	石川県自然解説員研究会総会	(金沢市)
2.6	温暖化調査成果報告会	(つくば市)	3.11	サル・クマの保護管理ワーキング会議	(県庁)
2.8	国土交通省砂防女性特派員案内	(ブナオ山観察舎)	3.13	白山の自然を考える会講演	(金沢市)
			3.16	希少種・外来種問題検討会	(県庁)
2.17	石川県自然解説員研究会役員会	(野々市町)	3.17	サル・クマの保護管理検討会	(県庁)
2.18	白山国立公園関係4県担当者会議	(県庁)	3.18	博物館等職員研修会	(金沢市)
2.19～20	白山フィールドセミナー「サルを数える」	(白山市瀬波)	3.22	白山自動車利用適正化連絡協議会	(本庁舎)
			3.23	環境省自然公園等事業の改革に係る説明会	(県庁)
2.22	野々市町菅原小学校案内	(ブナオ山観察舎)	3.25	いしかわレッドデータブック調査委員会	(県庁)
2.25	輪島市町野小学校案内	(ブナオ山観察舎)	3.27	白山講座「白山の高山帯に入り込んだ植物」	(金沢市)
2.27	小松市教育委員会案内	(ブナオ山観察舎)			

編集後記

雪形の話はいかがでしたか。長野県や新潟県ほど有名ではありませんが、白山にもあったのですね。これから雪解けが進むにつれ、あちらこちらに出てくるようになるでしょう。この春は、みなさんも雪形を探してみられたらいかがでしょう。新しい発見があるかもしれませんね。

カモシカの調査で、3月14～16日に金沢市の犀川上流にある水葉山周辺へ行ってきました。標高900m前後の山ですが、まだ積雪が1m50cmはありました。目的のカモシカを2か所の定点で観察し数を数えましたが、白山の蛇谷や目附谷ほど多くはないものの、結構多く見つけることができました。山の中ではまだ草は芽吹かず、雪の斜面から出た木の枝先を食べていました。多くの木々も、まだつぼみは固い状態でしたが、そんな中、マルバマンサクの枝に黄色の花を見つけることができました。山の中で、他に先駆けて咲く木の花です。

もう一つ発見がありました。それは昨年凶作であったブナに、花芽が付いていたことです。細くとがった葉になる芽と、はっきり区別できる丸くふくらんだ花になる芽を確認することができました。どうやら今年は去年のようなことはないようです。「はくさん」の前号にありましたように、白山のブナには、もう10年も豊作がないのです。そろそろ大豊作になってもよいのにと、期待していますがどうなることでしょう。

(上馬)

目次

表紙 手取峡谷黄門橋からの白山	上馬 康生 ...	1
白山の雪形「猿たばこ」	納口 恭明 ...	2
大汝峰はいつできた	東野外志男 ...	7
はくさん 山のまなび舎だより	松崎 紀子・谷野 一道 ...	11

はくさん 第32巻 第4号 (通巻134号)

発行日 2005年3月31日(年4回発行)
 編集発行 石川県白山自然保護センター
 〒920-2326 石川県白山市木滑又4
 TEL. 0761-95-5321 FAX. 0761-95-5323
 URL <http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/>
 E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
 印刷所 前田印刷株式会社